

【講演 4】 関東地方北東部における加曽利 E 式出現期の土器様相 —那珂川流域と鬼怒川・小貝川流域を中心として—

塚本師也

はじめに

関東地方東西の加曽利 E 式を、研究者が一堂に会して討論するという画期的なシンポジウムで、その外側にあたる関東地方北東部（栃木・茨城県域）で研究を進める筆者にできることを考えてみた。そして、那珂川と鬼怒川という 2 大河川に沿って、それぞれ 3 地域、2 地域の合計 5 地域に分け、阿玉台 IV 式期と加曽利 E I 式古・中・新段階の 4 時期を設け、土器群の変遷を示すこととした。

なお、加曽利 E I 式の細別については、口頸部に幅広い一帯の文様帯を設け、そこに沈線を沿わせない貼付隆帯で文様を描く土器を加曽利 E I 式古段階、口頸部の幅広い文様帯に、沈線を沿わせた隆帯で単位文を描き、これが上下の区画と接したり、短い隆帯で連携するものを加曽利 E I 式中段階、口頸部文様帯に渦巻文と区画文を交互に配す土器を加曽利 E I 式新段階のそれぞれ指標とした。

1 5 地域の編年案

（1）那珂川上流域

- ・阿玉台 IV 式期：阿玉台 IV 式と大木式系土器（七郎内 II 群土器、槻沢型、湯坂型、隆帯押捺型等）が伴う。
大木式系土器は中空突起が発達し、突起上を貼付隆帯で加飾する。
- ・加曽利 E I 式古段階：浄法寺類型が主体を占める。他に火炎系土器、口頸部文様帯に貼付隆帯で渦巻文や波状文を配す在地の土器が伴う。突起は前代を引き継ぐ。
- ・加曽利 E I 式中段階：キャリパー形の口頸部文様帯に沈線が沿う隆帯でモチーフを描く土器が増える。
大木 8 b 式的な土器も目立つ。浄法寺類型も残る。突起は、隆帯による加飾から沈線による加飾に変わる。
- ・加曽利 E I 式新段階：口頸部文様帯に渦巻文と区画文を交互に配す土器が主体を占める。浄法寺類型、火炎系土器や中空の突起は低調となる。

（2）那珂川中流域

- ・阿玉台 IV 式期：阿玉台 IV 式と大木式系土器（七郎内 II 群土器、坪井上型、湯坂型、隆帯押捺型等）が伴う。
大木式系土器の中空突起は那珂川上流域と同様である。
- ・加曽利 E I 式古段階：口縁に中空突起を付け、口頸部の幅広い施文域に貼付隆帯による文様を配し、胴部には大木式的な渦巻文や曲折文を配す土器を代表とする。突起や胴部文様を欠く土器もある。中峠式土器は低調である。
- ・加曽利 E I 式中段階：キャリパー形の口頸部文様帯に沈線が沿う隆帯でモチーフを描く土器が主体。
大木 8 b 式的な土器も目立つ。中空突起は那珂川上流域と同様。
- ・加曽利 E I 式新段階：口頸部文様帯に渦巻文と区画文を交互に配す土器が主体を占める。

（3）那珂川下流域

- ・阿玉台 IV 式期：那珂川中流域と同様の土器組成。大木式系土器の比率は低い。

- ・加曽利 E I 式古段階：背が高く、平縁で口頸部文様帯に細い隆帯で波状文等を描く土器が特徴的である。胴部に大木式系土器の文様はあまり施さない。他に口頸部文様帯に貼付隆帯を配す土器がある。中峠式土器が少量みられる。
- ・加曽利 E I 式中段階：キャリパー形の口頸部文様帯に沈線が沿う隆帯でモチーフを描く土器が増える。中空突起は少なく、大木 8 b 式的な土器や下総台地型がある。
- ・加曽利 E I 式新段階：口頸部文様帯に渦巻文と区画文を交互に配す土器が主体を占める。

(4) 鬼怒川・小貝川上流域（栃木県側）

- ・阿玉台 IV 式期：阿玉台 IV 式土器と中峠式土器が伴う。大木式系土器はそれほど多くはない。
- ・加曽利 E I 式古段階：中峠式土器と口頸部に貼付隆帯で文様を施す土器と下総台地型が伴う。大木式系土器も少量伴う。
- ・加曽利 E I 式中段階：キャリパー形の口頸部文様帯に沈線が沿う隆帯でモチーフを描く土器が増える。下総台地型の加曽利 E I 式がある。大木 8 b 式的土器が少量伴う。
- ・加曽利 E I 式新段階：口頸部文様帯に渦巻文と区画文を交互に配す土器が主体を占める。

(5) 鬼怒川・小貝川下流域（茨城県側）

- ・阿玉台 IV 式期：阿玉台 IV 式土器、中峠式土器と在地の勝坂式土器が伴う。
- ・加曽利 E I 式古段階：中峠式土器と口頸部に貼付隆帯で文様を施す土器と下総台地型が伴う。
- ・加曽利 E I 式中段階：キャリパー形の口頸部文様帯に沈線が沿う隆帯でモチーフを描く土器が増える。下総台地型の加曽利 E I 式がある。
- ・加曽利 E I 式新段階：口頸部文様帯に渦巻文と区画文を交互に配す土器が主体を占める。鬼怒川・小貝川流域は下総台地と共通する土器が多くみられる。

2 成果と今後の課題

(1) 加曽利 E 式の成立と関東地方北東部

加曽利 E 式は大木 8 a 式の影響下に成立すると言われてきた。関東地方北東部の加曽利 E 式直前の槻沢型、坪井上型、七郎内 II 群等の土器は、口頸部、頸部、胴部の 3 帯構成で、口頸部と胴部との 2 帯構成の加曽利 E 式とは異なる。文様も異なる。関東地方北東部の土器からは、加曽利 E 式は成立しない。

(2) 『日本先史土器図譜』の加曽利 E 式の「もっとも古い部分」との対比

加曽利 E 式の「最も古い部分」の標準とされた土浦近傍出土の土器は、口縁部下に無文帯を設ける。筆者は、無文帯の成立以前の土器を、これまで「加曽利 E I 式古段階」としてきた。今後細分の必要がある。一方これにより、「最も古い部分」より前に、阿玉台 IV 式土器がほぼ終焉を迎えていたことが分かった。

(3) 今後の課題

東西関東と関東地方北東部との加曽利 E I 式前後の並行関係把握は現時点では難しい。那珂川流域と鬼怒川・小貝川流域の並行関係が把握できれば、下総台地との編年対比はある程度可能と思われる。近年、千葉県柏市小山台遺跡で、西川博孝により、細い粘土紐による文様を特徴とする「小山台 (23) SI001 型深鉢」が仮称された。那珂川下流域の加曽利 E I 式古段階の土器と類似する手法である。両者の関係を検討することにより、両地域の土器群の並行関係が把握できるかもしれない。

2024年11月23日

関東地方北東部における 加曽利E式出現期の土器様相

— 那珂川流域と鬼怒川・小貝川流域を中心として —

塚本師也

本発表の目的

- I 加曽利E式土器出現期の関東地方北東部の土器様相
- II 加曽利E式土器成立への関東地方北東部の土器の関与
- III 磨消縄文出現以前の関東地方北東部の土器の変遷

那珂川上流域 一那須地方一



那珂川 (大田原市湯津上)



那須野が原（大田原市）



那珂川右岸河岸段丘 (那珂川町小川)

那珂川中流域—八溝山地鷺子・鷄足山塊—



那珂川 (茂木町大瀬)



鷺子山塊 (茂木町大瀬から)



鶏足山塊 (茂木町大瀬から)

那珂川下流域－東茨城北部台地－



那珂川河口



東茨城台地



東茨城台地

鬼怒川中流域



鬼怒川（さくら市氏家）



鬼怒川沿岸の平野（羽黒山から）

鬼怒川・小貝川下流域



鬼怒川
(結城市久保田)



小貝川



鬼怒川下流域

結 論

1 阿玉台Ⅳ式期から加曽利EⅠ式期への大きな土器の変化

那珂川流域の阿玉台Ⅳ式期の土器からは、直接加曽利E式は成立しない。

栃木県や茨城県で「大木8a式」と呼ばれている土器からは、加曽利E式は成立しない。

阿玉台Ⅳ式期から加曽利EⅠ式期への土器群の変化（那珂川流域）

阿玉台Ⅳ式期



阿玉台Ⅳ式



櫛沢型



坪井上型



七郎内Ⅱ群土器

加曽利EⅠ式古



浄法寺類型





阿玉台Ⅳ式期から加曽利EⅠ式期への土器群の変化（鬼怒川・小貝川流域）

阿玉台Ⅳ式期



加曽利EⅠ式古



2 加曽利EⅠ式古段階の多様な地域性

加曽利EⅠ式中・新段階の地域差の消失





土器の型式



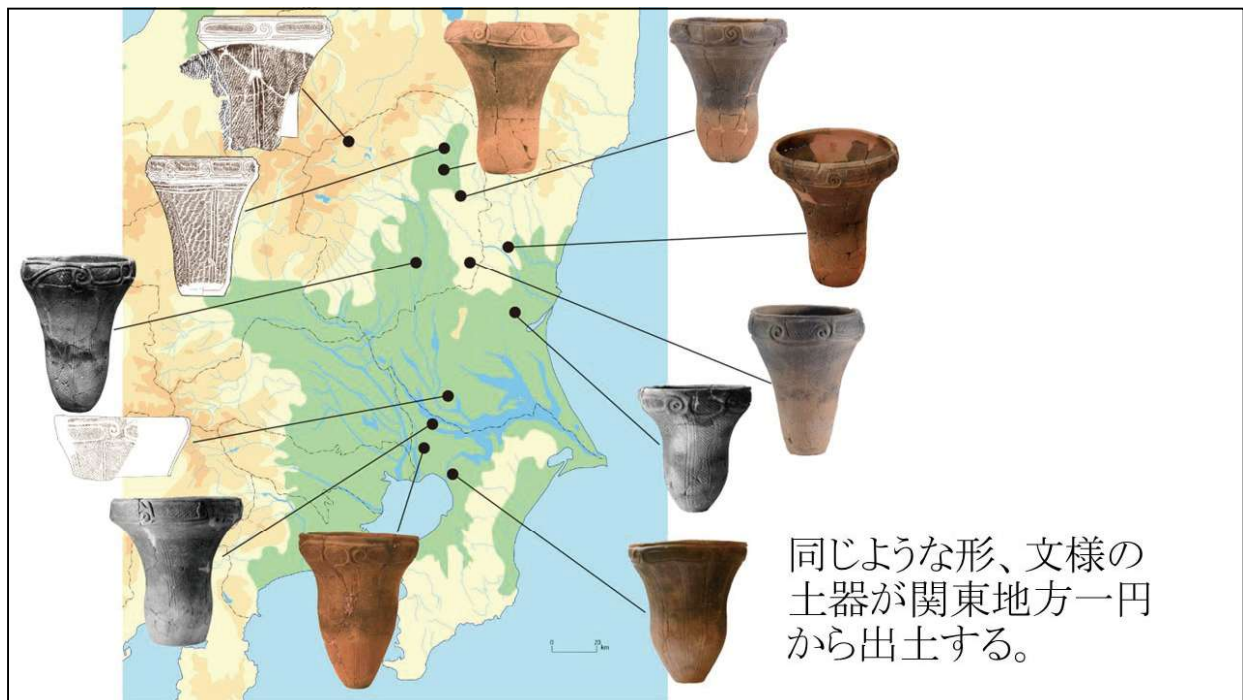
大田原市片府田富士山遺跡

同じ遺跡から、形や文様が似た土器が複数発見される。



縄文土器作り教室の作品

形や文様は、参加者が自由に決定するため、どれ1つとして同じものはない。



縄文土器の型式

- ・考古学者は、形や文様が似た土器群を“**型式**”と呼ぶ。

最初に発見された遺跡名をとって、「●●式」と呼ぶ。

- ・考古学者は、研究の手始めに、この型式による**年表（編年表）**作りを行う。

加曽利E式が始まる頃、複数の種類の土器が、1つの遺跡、1つの地域に多数存在する複雑な状況がある。

※「●●型」「●●類型」は、そうした土器群に付けられた名前である。

山内清男による型式制定の手順

「加曾利貝塚の発掘は（大正13年3月）、土器型式の内容決定、層位的事実、年代的考察に向かって僕らを躍進せしめた。」（山内1928）

- ①土器型式の内容決定 ②層位的な出土状況の把握
- ③年代的な前後関係の把握

「真に執るべき科学的手段は先づ個々の短い時代の文物を確認する。そしてこれらを層位又はその他の自然現象に応じて年代順を定める。又はその欠を補うため文物の比較をして先後を推定する。そして各々の短時期の文物を年代的に編成し、」（山内1937）

- ①短時間に残された文物の内容確認
- ②層位的な上下関係から年代的な前後関係の把握（層位学的方法）
- ③②ができない時、モノとモノを比較して前後関係を推定（型式学的方法）

縄紋土器型式の大別

	渡 島	陸 奥	陸 前	關 東	信 濃	東 海	畿 内	吉 備	九 州
早 期	住吉	(+)	槻木 1 ◇ 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根? × (+)	ひじ山 粕 畑		黒 島 ×	戦場ヶ谷 ×
前 期	石川野 × (+)	圓筒土器 下層式 (4 型式以上)	宝演 1 大木 ◇ 2 a,b ◇ 3-5 ◇ 6	垂田 } 花積下 關 山 式 黒 演 諸 磯 a,b 十三坊臺	(+) (+) (+) 跡 場	鉢ノ木 ×	國府北白川 1 大蔵山	磯ノ森 里木 1	森?
中 期	(+) (+)	圓筒上 a ◇ b (+) (+)	大木 7a ◇ 7b ◇ 8 a,b ◇ 9, 10	御領臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 E ◇ (新)	(+) (+) (+) (+)			里 木 2	曾畑 阿高 出水 } ?
後 期	青柳町 × (+) (+)	(+) (+) (+)	(+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B " " 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾 ×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西 平
晩 期	(+)	龜ヶ 岡式 (+) (+) (+)	大洞 B " B-C " O1, 2 " A, A'	安行 2-3 " 3	(+) (+) (+) 佐野 ×	吉胡 × " × 保美 ×	宮瀧 × 日下 × 竹ノ内 × 宮瀧 ×	津雲下層	御 領

註記 1. この表は假製のものであつて、後日訂正増補する筈です。
2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。

山内清男1937

土器型式を基準とした年表（編年表）

「大木8a式」の呼称



山内清男による大木8a式



山内清男による加曾利E式（最も古い部分）

大木8a式：山内清男により、関東地方の加曾利E式の最も古い部分に並行する土器として設定された。

下田西 陸平
土浦近傍
下田西 上本郷
(西関東) (東関東)
関東地方の加曾利 E 式の古い部分
(山内清男による)

大田原市長者ヶ平遺跡 SK4
那須地方の同時期の土器
※ 仙台湾や関東地方南部とは異なる土器

大木囲貝塚
陸前地方の大木 8 a 式
(山内清男による)

大木 8 a 式と加曾利 E 式の古い部分

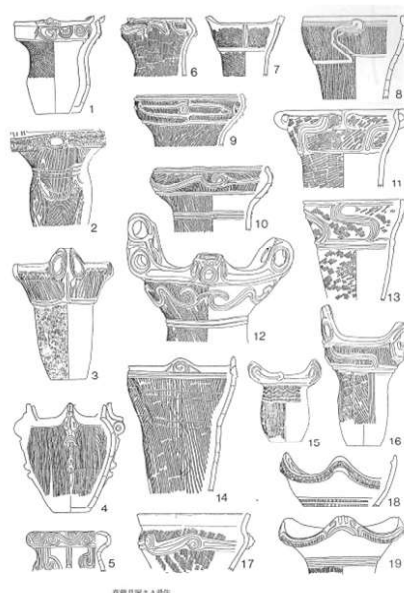
阿玉台 III	栃木県那須地方 「大木 8a 式古段階」	仙台湾周辺 (大木囲貝塚)
阿玉台 IV	「大木 8a 式中段階」	
加曾利 E 古 大木 8a	「大木 8a 式新段階」	山内清男による「大木 8a 式」
加曾利 E 中・新 大木 8b		山内清男による「大木 8b 式」

栃木で「大木 8 a 式」と呼ばれる土器

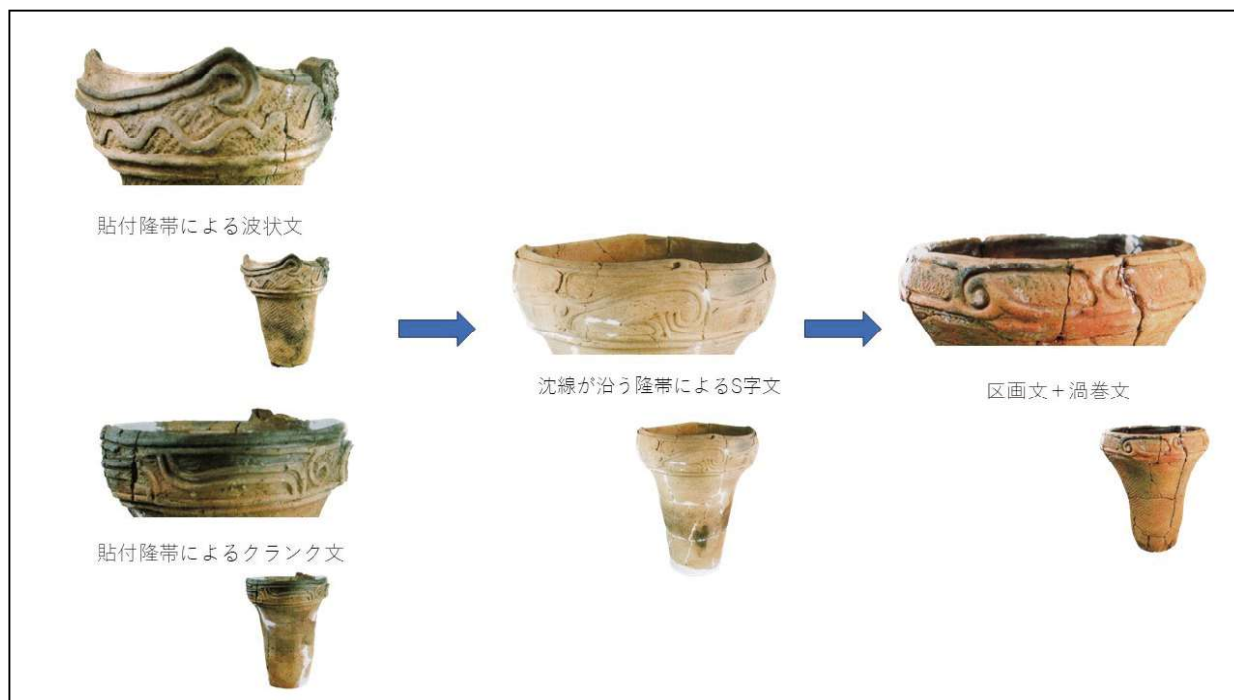
演者の研究の経緯



加曽利E式土器の概型
動坂貝塚報告文



花積2A号住
花積貝塚2A号住



各地の土器群の変遷

那珂川上流域 — 那須地方 —



阿玉台Ⅳ式期の土器



槻沢遺跡14H-P2

塚本⑱



加曽利E I 式古段階



浄法寺類型



浄法寺類型に伴う土器

那須地方では、加曽利E1式古段階に、浄法寺類型が組成のなかで主体を占める。

加曽利E I 式古段階

※ 浄法寺類型の成立



新潟 火焰型土器



会津 火炎系土器



那須 火炎系土器



会津 浄法寺類型



那須 浄法寺類型

※ 火炎系土器・浄法寺類型は、茨城県では低調である。

加曽利E I 式中段階



S K-086出土土器

三輪仲町遺跡（栃木県那珂川町）

小川忠博氏撮影

那珂川上流域の加曽利E I 式中段階の代表的な土器



加曽利E I 式



大木8b式



剣先文を配す土器



突起が付く土器



浄法寺類型

塚本②①

加曽利E I 式新段階



S K-073出土土器

三輪仲町遺跡（栃木県那珂川町）

小川忠博氏撮影

加曽利E I 式新段階



加曽利E I 式



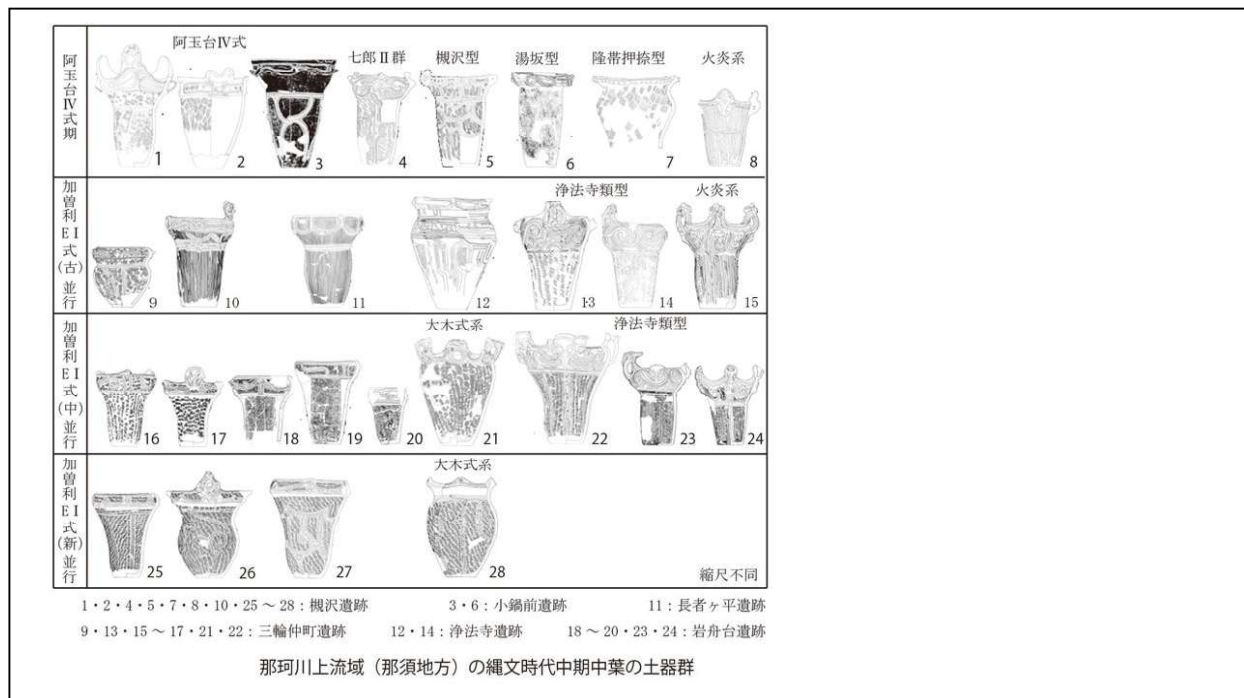
加曽利E I 式



※ 胴部文様施文



大木8b式



那珂川中流域 —八溝山地鷲子・鶏足山塊—



阿玉台Ⅳ式期の土器



SK505 出土遺物

滝ノ上遺跡

阿玉台Ⅳ式期の土器



阿玉台Ⅳ式土器



湯坂型



屈折鋸歯文



滝ノ上型



隆帯押捺型



七郎内Ⅱ群土器



★は坪井上遺跡。他はすべて滝ノ上遺跡

塚本②④

阿玉台Ⅳ式期の土器



滝ノ上型（高ノ倉遺跡）



滝ノ上型（滝ノ上遺跡）

加曽利EⅠ式古段階



SK512 出土遺物

滝ノ上遺跡

加曽利E I 式古段階



滝ノ上遺跡

坪井上遺跡

加曽利E I 式中段階



滝ノ上遺跡

滝ノ上遺跡

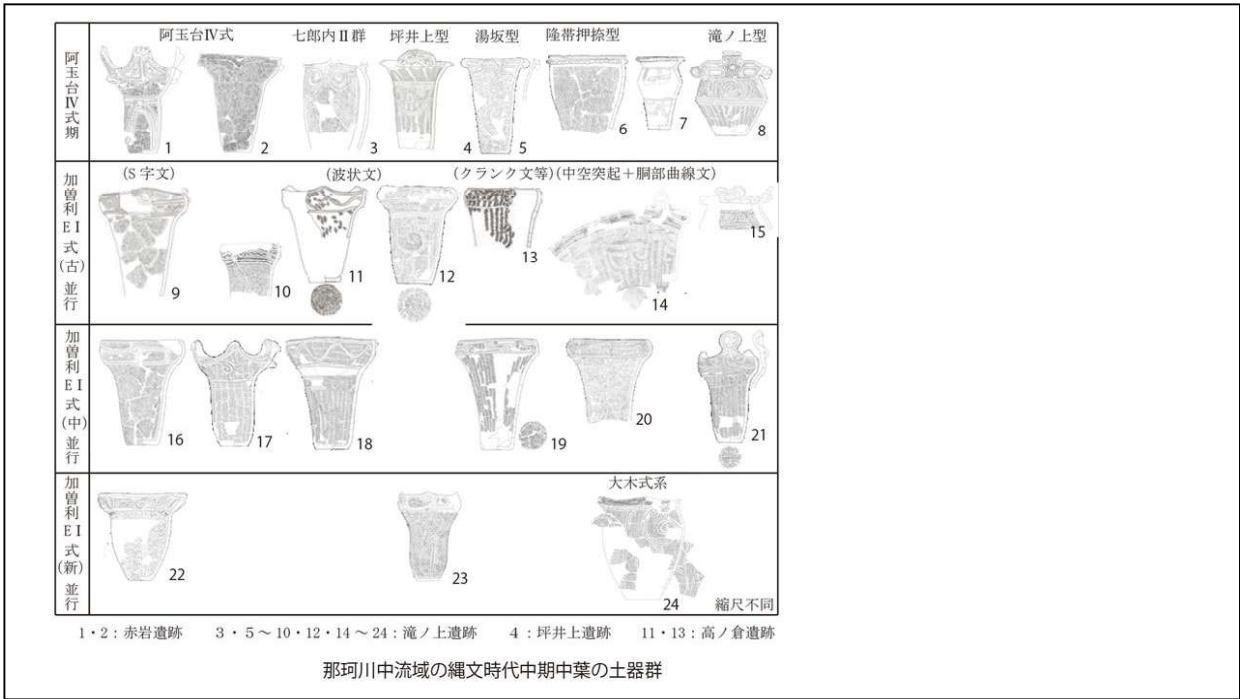
坪井上遺跡

滝ノ上遺跡

滝ノ上遺跡

滝ノ上遺跡

※ 東関東地方に多い「下総台地型」は低調である。



那珂川下流域 — 東茨城台地 —



阿玉台Ⅳ式期の土器



阿玉台Ⅳ式土器



櫛沢型



隆帯押捺型



滝ノ上型

宮後遺跡

※ 中峠O地点型深鉢など、東関東系の土器是那珂川流域では低調である。



加曽利E I 式新段階



宮後遺跡

阿玉台IV式期	阿玉台IV式	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
加曽利E I 式(古)並行	阿玉台式	(S字文)	(クランク文)	(対向鋸文)	(細い隆帯の波状文)	中峠6次1住型	勝坂式系				
加曽利E I 式(中)並行	(S字文)	(クランク文)	(弧状文)	(波状文)	(剣先文)	下総台地型	勝坂式系				
加曽利E I 式(新)並行											
	縮尺不同	28	29			(波状文)	(剣先文)	大木式系	勝坂式系		33

全て宮後遺跡

那珂川下流域の縄文時代中期中葉の土器群

鬼怒川中流・小貝川上流域



阿玉台IV式期の土器



御城田遺跡



阿玉台IV式土器



御霊前遺跡



御城田遺跡

大木式系式土器



御霊前遺跡



御霊前遺跡

中峠式土器

加曽利E I 式古段階



御城田遺跡



島田遺跡



島田遺跡



城内遺跡



上の原遺跡



御城田遺跡

浄法寺類型

加曽利E I 式中段階



下総台地型



良文B地点型

上段：御霊前遺跡



御城田遺跡



島田遺跡

大木8b式

加曽利 E I 式新段階



御霊前遺跡



御城田遺跡



島田遺跡



1・5・7・9・12：御城田遺跡 2・3・8・25：御霊前遺跡 4：竹下遺跡 11・19：上の原遺跡
6・10・13～17・21・23・28・33・34：寺野東遺跡 22・24・26・27・29～32：島田遺跡
18：松原北遺跡 20：高尾神遺跡

鬼怒川中流域・小貝川上流域の縄文時代中期中葉の土器群

鬼怒川・小貝川下流域



阿玉台IV式期の土器



陸平貝塚



下広岡遺跡



中台遺跡



阿玉台IV式土器



陸平貝塚

中峠O地点型



加曽利E I 式新段階



前田村遺跡

阿玉台IV式期	勝坂式系 阿玉台IV式 中峠O地点型
加曽利E I 式(古)並行	勝坂式系 (クランク文) 下総台地型 中峠O地点型
加曽利E I 式(中)並行	(剣先文) (波状文) (クランク文) 下総台地型 (縦位隆帯貼付文) (弧状文) (褶曲文)
加曽利E I 式(新)並行	

縮尺不同

1・3・4・14・19・21・22：前田村遺跡 2・6：陸平貝塚 5・7：下広岡遺跡 8・11～13：西原遺跡
9・15・18・23：中台遺跡 10・16：東台遺跡 17・20：赤弥堂遺跡 24：六十原遺跡

鬼怒川・小貝川下流域の縄文時代中期中葉の土器群

反省と課題

山内清男の標準資料との対比

- 沈線に沿わせない貼付隆帯を追いかけているうちに、山内の「最も古い部分」以前の土器を「加曽利EⅠ式古段階」としてきた。
- 関東地方北東部で、「最も古い部分」に対比される資料を、改めて把握する必要がある。

※ 細分の可能性

- 「最も古い部分」より前に、口頸部に一帯の広い施文域を配す土器の一群があることは確実である。そして、その段階で「阿玉台Ⅳ式」は、命脈を保つ程度の存在となっていた。



細分と地域間の並行関係の把握

- 那珂川中・下流域の土器群については、細分の腹案はある。
- 那珂川上流域の土器群については、加曽利E式成立期（浄法寺類型成立期）の土器群の変化が大きい。今のところ細分の腹案はない。
- 柏市小山台貝塚で西川博孝が指摘した「小山台（23）SI001型深鉢」の「細く貼付が稚拙」な単隆線や背割れ隆線、さらには、小山台SI001の組合せを、鬼怒川・小貝川流域、さらには那珂川流域で検討することが有効と思われる。
- 那珂川流域と鬼怒川・小貝川流域の土器群の並行関係が把握されれば、関東から東北南部までの広域編年の確立を、大きく進展させることができる。



塚本③⑨

※スライド掲載の土器写真の引用元は、予稿集の参考・引用文献参照